

「V てくれる/あげる」構文における恩恵と動作の受け手 の重層構造が引き起こす習得困難点

—— 恩恵と動作の受け手の混同・ニ格とノタメニ格の混同において ——

李強楠(関西大学大学院生)

1. はじめに

菊地・前原(2023:8~10)では「V てくれる」は学習者が問題なく使えて理解できるタイプ「A」と学習者があまり使えていないタイプ「B」とに分けられている。

タイプ「A」:お金を貸してくれる／写真を見せてくれる／パンフレットを持ってきてくれる
／漢字を教えてくれる／使い方を説明してくれる

タイプ「B」:駅まで送ってくれる／店を予約してくれる／電気を点けてくれる／話を聞いて
くれる／(自分が作った料理)を食べてくれる

そのうえで、タイプ「B」の認知的な難しさについて、「具体的な行為そのものを見る限り、恩恵の授受と一致した向きが見てとれない。〈視覚的な認知として、恩恵の向きが見てとれない〉(中略)〈行為そのものが相手から自分に向かう場合〉でなければ「V てくれる」は使えない」と学習者が誤って理解してしまうのは、今述べた「B」の認知的な難しさということもあると指摘されている。また、(1)~(3)の例が挙げられ、「N をくれる」の場合には「リーさんは私におみやげをくれました。」のように受益者に「に」が付くことから、それに倣って「V てくれる」の場合も機械的に同じ「に」を付けてしまい、(中略)不適当に「V てくれる」に拡張してしまうこと(一種の過剰般化)による面が大きいと考えられる」と主張されている。

(1) リーさんは私に(×, →を)駅まで送ってくれました。

(2) リーさんは私に(×, →の)荷物を運んでくれました。

(3) リーさんは私の子供に(×, →と)遊んでくれました。

しかし、タイプ「B」の認知的な難しさとニ格の過剰般化の本質的な原因是まだ明らかになっていない。本稿ではその原因をさらに掘り下げるために、学習者はニ格とノタメニ格、恩恵と動作の受け手をどのように捉えているかを調査した。なお、本研究では着目しているのは「てくれる/あげる」構文における受け手の形式格(表層格)と意味格(深層格)である。そのため、山岡(2008:125)のいう「アゲルとクレルとは、格の視点・人称において性質が異なるが、意味格の構造においては、全く同じである。」にしたがい、「てくれる」構文と「てあげる」構文を区別せずに扱う。結論から言えば、その本質的な原因是、学習者がニ格とノタメニ格とその意味格である恩恵と動作の受け手を混同し、区別できていないことにあると考えられる。学習者は単純に、機械的にニ格を過剰に付けているのではなく、ニ格が恩恵と動作の受け手の両方を示すと誤って捉えているうえ、ノタメニ格との区別ができていない可能性が高い。また、その背景には現行の恩恵の受け手の記述と説明が日本語教育の場では、必ずしも適切ではない点があると推察する。

さらに、現実の「てくれる構文」では恩恵の受け手は省略されるのが普通である。例えば、スリーエーネットワーク編(2000:203)では「恩恵の受け手である「わたし」を省略した形で練習する」と述べられている。このように、(1)、(2)の場合、恩恵の受け手が省略されていれ

ば、「(1) リーさんは駅まで送ってくれました。(2) リーさんは荷物を運んでくれました。」のよう、表記上、一見正確な文となるが、これは読み手が恩恵の受け手を自動的に補完しているためである。学習者が文を作る際、その背後に潜む恩恵の受け手を十分に把握していない恐れが、依然として存在すると考えられる。

2. 恩恵と動作の受け手、ニ格とノタメニ格に関する現行の記述と説明

日本語記述文法研究会編(2009:5, 6)では、ニ格について、着点、相手、場所、起因・根拠、主体、対象、手段、時、領域、目的、役割、割合が挙げられている。その中の相手、対象は、動作の相手、授与の相手(おばあさんが孫に絵をやる)、受身的な動作の相手、基準としての相手、動作の対象、心的活動の対象と記述されている。日本語記述文法研究会編(2009:105, 106)では複合格助詞ノタメニ格について、起因・根拠、動作の目的だと記述されている。以上から、動作の受け手は明確に記述されているのに対して、恩恵の受け手は明確に記述されていないことが明らかになった。そこで、「V てくれる/あげる」構文における恩恵の受け手はどのように記述されているかを見てみたい。

「てくれる」は、動作者を「が」、受益者(恩恵の受け手)を「に」または「のために」で表す。動作者は恩恵の与え手となる。

- ・あの人が僕に英語を教えてくれたんだ
- ・娘が私のために料理を作ってくれた。

ただし、動作の対象が受益者になる場合には、対象を表す「を」がそのまま用いられる。

- ・道に迷っていた人を助けてあげた。

日本語記述文法研究会編(2009:128)

山田(2004:89)は「動詞の項が受益者となる場合、その項としての格表示が保持されるが、特に強調したい場合に限ってノタメニ格が用いられる。また、主語以外に項を持たない自動詞の場合や、項以外に受益者を取る場合にはノタメニ格で表される。」と述べている。

また、総合的な日本語教科書を確認したところでは恩恵と動作の受け手の明示的な区別は見当たらない。例えば、スリーエーネットワーク編(2010:182)では「て形と結びついた授受動詞は、その動作と同時に利益や恩恵のやり取りもあらわします。」と説明されている。

従って、上記の山田(2004:89)や日本語記述文法研究会編(2009)のような現行の記述に基づくと思われる現場での説明では恩恵の受け手に固有の形式格が存在せず、結果として恩恵の受け手の形式格がニ格、ノタメニ格、ヲ格、ト格などにわたっているように(学習者には)見える可能性がある。だとすれば、学習者がタイプ「A」を学ぶ過程で定着した「ニ格=恩恵と動作の受け手」という誤った認識をそのままタイプ「B」に過剰般化し、恩恵と動作の受け手を混同したとしても不思議ではないだろう。

3 調査概要

3.1 調査方法と調査協力者

本調査では恩恵と動作の受け手、ニ格とノタメニ格の混同を検証するために、初中級と上級レベルの学習者を対象に、調査問題を作成し、回答を収集した。また、協力者の回答意図を確認するために、フォローアップインタビューを行い、ニ格とノタメニ格の区別とその意味格である恩恵と動作の受け手の区別を答えてもらった。

【調査方法と調査目的】

本調査では「V てくれる/あげる」構文と授受補助動詞を除いた「V」のみの構文を用いて、問題文を作成し、質問紙調査を実施した。全ての問題文は(1) (2) (3) のようにニ格(有生名詞句)を取れば、誤文となる条件である。調査は対面で行い、回答の後その場で用紙を回収した。また、回収後に一部の協力者を対象にフォローアップインタビューを実施した。

また、本調査の目的は、学習者によるニ格とノタメニ格の許容率と、それらに対応する意味格の認識を解明することにある。具体的には、「V てくれる/あげる」構文と「V」のみの構文における許容率を比較することで形式格の混同の有無を検証し、その要因を探る。これに加え、フォローアップインタビューにより得られた協力者の意見を分析し、意味格である恩恵と動作の受け手に対する学習者の理解の実態を補足的に明らかにする。

【調査協力者と実施時期】

日本の専門学校の中級クラスと上級クラスに在籍する就職と進学を目的とする初中級学習者と上級学習者である。出身はベトナム、中国、バングラデシュ、ミャンマーなどである。合わせて、53名となっている。その中、N3、N2 レベルの初中級学習者は 39名で N1 レベル以上の上級学習者は 14名である。実施時期は 2025年6月～2025年8月である。

3.2 調査問題と分析方法

本調査では、22の動詞(N5～N3 レベル)を主節の述語に「V てくれる/あげる」構文と「V」のみの構文を問題文に作成した。全部 22 の動詞について、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を用いた調査を行い、その結果、ニ格(有生名詞句)とは共起できないことを確認した。下記は質問紙における正誤判断問題と多肢選択問題の具体例である。正誤判断問題の場合、主節の述語の(動詞/本動詞)が同じの問題文 1a、1b、1c、1d を一つの組とし、5組を用意した。多肢選択問題の場合も同様に、問題文 2a、2b を一つの組とし、17組を用意した。合計で 22組である。ただし、質問紙における問題文の順番はランダムである。また、分析方法について、正誤判断問題では、1ab と 1cd を対照し、正誤判断問題では 2a と 2b を対照し、「V てくれる/あげる」構文と「V」のみの構文の間でニ格とノタメニ格の許容率の差を比較検証する。

I. 正誤判断(文として正しいかどうかを判断して、○か×を記入してください。)

1a 場面: 妹 いもうと を助けたことについて、あなたは話している。

問題: 私も仕事で疲れたけど、妹 いもうと に荷物を運んだ。()

1b 場面: 妹 いもうと を助けたことについて、あなたは話している。

問題: 私も仕事で疲れたけど、妹のために荷物を運んだ。()

1c 場面: 友達の小野さんを助けたことについてあなたは話している。

問題: 小野さんが重い袋 おの を持っていたから、彼女にその袋 かのじょ を運んであげた。()

1d 場面:友達の小野さんを助けたことについてあなたは話している。

問題:小野さんが重い袋を持っていましたから、彼女のためにその袋を運んであげた。()

II. 多肢選択問題(2つか2つ以上の正しい答えがある。思った答えをすべて○で選んでください)

2a 場面:仕事で疲れた彼氏を助けたことについて、あなたは話している。

問題:私も忙しいけど、それでも大変な仕事を手伝った。

選択肢: a. 彼氏のために b. 彼氏を c. 彼氏に d. 彼氏の e. なし

2b 場面:彼氏からの手伝いについて、あなたは話している。

問題:彼氏は毎晩遅くまで、仕事を手伝ってくれている。

選択肢: a. 私に b. 私のために c. 私を d. なし e. 私の

3a 場面:彼女の病気について、あなたは話している。

問題:僕はとても忙しいけど、すごく心配だから、病院の前でずっと待っている。

選択肢: a. 彼女のために b. 彼女を c. 彼女と d. 彼女に e. なし

3b 場面:母と買い物に行ったことについて、あなたは話している。

問題:僕は仕事で疲れたけど、スーパーで3時間待ってあげた。

選択肢: a. 母のために b. 母が c. 母を d. 母に e. なし

総じて言えば、検証は、比較分析を通じて行う。具体的には、「Vてくれる/あげる」構文と「V」のみの構文の間でニ格とノタメニ格の許容率を比較し、学習者による混同の有無を検証する。または、混同の主たる要因が授受補助動詞と本動詞「V」のいずれにあるかの解明を目指す。以上の問題によって検証するのは、以下の仮説1である。

仮説1:タイプ「B」のような「Vてくれる/あげる」構文において、学習者の中でニ格とノタメニ格は同時に許容されるのに対し、「Vのみ」の場合、ニ格が許容されにくい

さらに、ニ格とノタメニ格の比較に加え、学習者が「Vてくれる/あげる」構文におけるニ格をどのように認識しているかを検証するため、ニ格とヲ格の許容率についても比較を実施する。ただし、ヲ格(有生名詞句)を必須格に取り得るタイプの問題文については、「Vてくれる/あげる」構文と「V」のみの構文をそれぞれ6問ずつ用意し、対応する6組を作成した。つまり、全部22組の中の6組である。具体例は3abである。したがって、ニ格とヲ格の許容率の比較にあたり、この6組を仮説2の統計分析の対象とする。

仮説2:ヲ格(有生名詞句)を必須格に取り得る「Vてくれる/あげる」構文では学習者の中でニ格は許容されやすいのに対して、「Vのみ」の場合、ニ格が許容されにくい。

3.4 調査結果

表1 ニ格とノタメニ格の比較 (n=106)

対応のないt検定

変数	ニ格(n=53)		ノタメニ格(n=53)		p 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
「Vてくれる/あげる」	12.60	3.92	13.62	4.60	.223
「Vのみ」	8.98	3.97	14.15	4.36	<.001

ニ格とノタメニ格の許容率をT検定で分析したところ、「Vてくれる/あげる」構文の場合、($t(104)=-1.225, p=.223$)である。ニ格とノタメニ格の間で許容率に有意差が認められなかった。それに対してVのみの構文の場合、($t(104)=-6.369, p<.001$)である。ニ格とノタメニ格の間で許容率に有意差が認められた。これは仮説1を支持する結果となった。したがって、「Vてくれる/あげる」構文においては、学習者にニ格とノタメニ格の混同が見られ、その主な要因として授受補助動詞の影響が考えられる。

表2 ニ格とヲ格の比較 (n=106)

対応のないt検定

変数	ニ格(n=53)		ヲ格(n=53)		p 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
「Vてくれる/あげる」	3.66	1.58	2.60	1.62	<.001
「Vのみ」	2.83	1.52	3.75	1.39	<.001

また、ニ格とヲ格の許容率を比較し、T検定で分析したところ、「Vてくれる/あげる」構文の場合、($t(104)=3.397, p<.001$)である。ニ格とヲ格の間で許容率に有意差が認められ、ヲ格と比べ、ニ格の許容率が有意に高かった。それに対して、「V」のみの構文の場合、($t(104)=-3.248, p<.001$)である。ニ格とヲ格の間で許容率に有意差が認められ、ヲ格と比べ、ニ格の許容率が有意に低かった。これは仮説2を支持する結果となった。この逆転現象は「Vてくれる/あげる」構文において、授受補助動詞が学習者の格選択に決定的な影響を与えていていることを示している。学習者は、ニ格を授受補助動詞が要求する受け手の形式格だと誤って認識し、それが本動詞が要求する必須格よりも優先されると考えている可能性が示唆された。

表3 「Vてくれる/あげる」構文における初中級と上級協力者の成績の比較 (n=53) 対応のないt検定

変数	初中級(n=39)		上級(n=14)		p 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
ニ格	12.74	3.89	12.21	4.13	.670
ノタメニ格	14.97	4.04	9.85	4.03	<.001

さらに、初中級と上級協力者におけるニ格とノタメニ格の許容率を比較し、T検定で分析したところ、ニ格の場合、($t(51)=.429, p=.670$)である。初中級と上級協力者の間に有意差が認められなかった。それに対して、ノタメニ格の場合、($t(51)=4.896, p<.001$)である。初中級と上級協力者の間に有意差が認められ、上級協力者のノタメニ格の許容率が有意に低かったことが示された。この結果から、ニ格は過剰般化されたうえで、学習者の中で「Vてくれる/あげる」構文の受け手の代表格に化石化されていく傾向が見られた。

続いて、フォローアップインタビューでは、「Vてくれる/あげる」構文の受け手に対する学習者の認識を調査した。具体的には4bのように、一つの問題文で、ニ格とノタメニ格を同時に選んだ協力者に対し、「この文では、ニとノタメニの違いは何ですか」と質問した。その際に「ニとノタメニの違いがわかりませんが、強いて言えば、ノタメニの方は私への恩恵の感じがより強い。ニは私にやった動作の方向を示す感じが強いです。(上級・中国)」という回答が得られた。そこで、調査者は「ニは恩恵を示さないのか」と再び質問した。協力者からは「そうでもない」という意見が得られた。

4b 場面: 彼氏からの手伝いについて、あなたは話している。

問題: 彼氏は毎晩遅くまで、仕事を手伝ってくれている。

選択肢: a. 私に b. 私のために c. 私を d. なし e. 私の

実際、山田(2004:89)にしたがえば、4b では、二格(有生名詞句)は許容されるべきではない。しかし、協力者は二格を許容したうえで、ノタメニ格との違いを明確に区別していない。協力者の回答から、恩恵の受け手にはノタメニ格、動作の受け手には二格を使うという認識がうかがえるものの、その区別自体が明確な判断として見えない。むしろ、方向性が感じられれば、それが恩恵による方向性なのか動作による方向性なのかを問わず、二格またはノタメニ格が許容できると判断されたと言った方が適切だろう。この結果から、学習者は二格とノタメニ格を明確に区別できておらず、その意味格である恩恵と動作の受け手の違いを正確に理解していない可能性が高いことが示唆された。

以上の調査結果と協力者の回答から、「V てくれる/あげる」構文において、学習者は二格とノタメニ格とその意味格である恩恵と動作の受け手を混同しており、「二格=恩恵と動作の受け手」という誤った認識を持っている可能性が高いことが示唆された。さらに、学習者は、授受動詞が文中に現れると、恩恵や動作の方向性を自然に感じられる。その結果、その受け手を示す際には「二格」(恩恵と動作の受け手)を使用すべきだという誤った言語ストラテジーを適用してしまう可能性がある。加えて、その誤った言語ストラテジーが化石化されていく危険性も懸念される。

4. 恩恵と動作の受け手の混同・二格とノタメニ格の混同の一括解決に向けて

4.1 恩恵と動作の受け手、二格とノタメニ格における重層構造

学習者が二格とノタメニ格、恩恵と動作の受け手を混同している現状を踏まえると、教授上の重要な課題として、「二格=恩恵と動作の受け手」という誤った認識を解きほぐす必要がある。その際に、二格は動作の受け手でノタメニ格は恩恵の受け手であるのを学習者に認識してもらえば、二格とノタメニ格とその意味格である恩恵の受け手と動作の受け手の混同を未然に防ぐことができると考えられる。そこで、山岡(2008)が主張する授受構文の意味格構造を見て行きたい。「くれる/あげる」構文の受け手について、山岡(2008:124~126)は目標格(動作の受け手)・受益者格(恩恵の受け手)のように、分離可能な二重の意味格が存在すると認め、動作の受け手を強調すれば、二格に、恩恵の受け手を強調すれば、ノタメニ格に、というように随意的に形式格を選べると述べている。

カラ・ガ	ニ・ノタメニ	ヲ	アゲル/クレル
起点-動作主格	目標格-受益者格	対象格	(山岡(2000:127)を筆者一部修正)

また、「V てくれる/あげる」構文について、山岡(2000:127)では「授受補助動詞も一般の動詞や授受動詞と同様に必須格を要求し、名詞句との間に独自の関係(意味格)を持つ。」と述べられている。また、「V てくれる/あげる」構文における受け手の形式格と意味格の対応関係について、山岡(2008:128~129)は、i ~ iii の場合、受益者格が本動詞が要求する必須斜格(つま

り能動態の際に主語とならない必須格)のいずれかに対し、二次格として付与され、当該必須斜格の情報と融合されるが、その際、形式格にノタメニ格が現れる必要がないとする。一方、ivのような受益者格が強調される場合、またはv、viのような本動詞が要求する必須斜格のいずれにも対応しない場合、ノタメニ格を取って、表層に出てくるという。

i	太郎が	花子を	助け	てあげる。
対象格・受益者格↑				
ii	太郎が	花子に	本を	貸し てあげる。
iii	太郎が	花子に	会つ	てあげる。
目標格・受益者格↑				
受益者格のみ↓				
iv	太郎が	花子のために	助け	てあげる。
v	太郎が	花子のために	死ん	てあげる。
vi	太郎が	雪子のために	花子を	助け てあげる。

(山岡(2008:128~129)を筆者一部修正)

山岡(2008)にしたがえば、i～iiiのように、授受補助動詞が要求する必須格の情報は本動詞が要求する必須斜格の情報と融合されることがあるが、恩恵の受け手は動作の受け手、動作の対象格などとは互いに独立していると考えられる。また、恩恵の受け手の形式格であるノタメニ格は省略されることがあるが、その存在が消滅するわけではないといえるだろう。

4.2 学習者に向けた二格とノタメニ格、恩恵と動作の受け手の説明

前述から、現行の記述と説明では、恩恵の受け手には固有の形式格が示されていないため、学習者は授受補助動詞を「二格=恩恵と動作の受け手」と結びつけて捉える危険性が指摘できる。それに対して、山岡(2008)によれば、意味格としての恩恵の受け手とその形式格であるノタメニ格が、授受補助動詞により要求される独立した必須格と認められる。本研究では山岡(2008)を踏まえ、教育上、学習者に対する説明として「恩恵の受け手にはノタメニ格、動作の受け手には二格をと教えること」を提案したい。ただし、この提案に際して、山岡(2001:30)の表2が示した「恩恵の受け手が対応する形式格は二格とノタメニ格である」という主張を修正し、「二格が恩恵の受け手を示すということはない」のように、ノタメニ格(恩恵の受け手)と二格(動作の受け手)の完全な分離を明確にする必要がある。

したがって、本研究では、タイプ「A」「B」を問わず、ノタメニ格(恩恵の受け手)が省略されることがあっても授受補助動詞が要求する必須格として存在し、二格(動作の受け手)とは相互独立していると主張する。下記の具体例が示すように、①では「私のために」が恩恵の受け手を、「私に」が動作の受け手をそれぞれ示す。②でも同様に、「私のために」が恩恵の受け手を、「私の仕事を」が動作の対象を示す。①と②の場合、恩恵の受け手と動作の受け手(または動作の対象)が重複するため、恩恵の受け手を表す「私のために」は省略されることになる。一方、③では恩恵の受け手と動作の対象が異なるため、このような省略は生じない。

① タイプ「A」:彼女は(私のために)私に英語を教えてくれた。

- ② タイプ「B」:彼女は(私のために)私の仕事を手伝ってくれた。
- ③ タイプ「B」:彼女は私のために弟を助けてくれた。

* () 内は省略されるべき

このように指導することで、学習の初期段階から、恩恵の受け手を「ニ格」で示そうとする誤りを避け、「恩恵の受け手にはノタメニ格を、動作の受け手にはニ格を」と、その意味格の違いに基づいて確実に区別する基盤が形成されると考えられる。さらに、既習者においても、この明確な区別は、恩恵の受け手の正確な運用へと導くものとなると期待できる。

5. おわりに

本研究は、「Vてくれる/あげる」構文の習得過程において生起しやすい、恩恵の受け手と動作の受け手、並びにその形式格であるニ格とノタメニ格の混同の問題に着目した。そして、現行の文法記述において恩恵の受け手に対応する固有の形式格が明示されていないことを背景に、学習者が「ニ格=恩恵と動作の受け手」という過剰般化された言語ストラテジーを構築し、それが上級段階まで持続・化石化される傾向があることを実証的に示した。

また、「Vてくれる/あげる」構文では、学習者がニ格を過剰許容し、ノタメニ格との区別が困難である実態が明らかとなった。この混同は授受補助動詞に強く影響されており、タイプ「B」の認知的な難しさとニ格の過剰般化の根本的な原因の一端をなしていることが示唆された。

こうした問題に対し、本研究は山岡(2008)の議論を発展させ、意味格のレベルで「恩恵の受け手」と「動作の受け手」を明確に分離し、それぞれにノタメニ格とニ格を結びつけて指導する方法を提案した。このアプローチは、従来の記述が抱える問題点を理論的に克服し、タイプ「B」の認知的な難しさと学習者の誤った格選択を未然に防止すると考えられる。

今後の課題としては、タイプ「B」における「てくれる」の不使用とニ格の過剰般化という問題への教育的介入として、本研究で提案した指導法の有効性を教育現場で実証的に検証することが挙げられる。また、記述文法の観点から考えれば、①のように、ノタメニ格とニ格の存在が同時に認められれば、恩恵の受け手の形式格はどれになるのかという疑問が残っている。つまり、ニ格は恩恵の受け手を表すことがあるかどうかを明らかにする必要がある。

参考文献

- 菊地康人・前原かおる(2023)「文法的な見方を生かす授受動詞の日本語教育設計」『日本語文法』21(1), 4-19
- スリーエーネットワーク(編)(2010)『初級1 大地教師用ガイド』スリーエーネットワーク。
- スリーエーネットワーク(編)(2000)『みんな日本語初級I 第2版教え方の手引き』スリーエーネットワーク。
- 日本語記述文法研究会(編)(2009)『現代日本語文法2』くろしお出版。
- 山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブー「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法ー』明治書院。
- 山岡政紀(2001)『日本語の述語と文機能』くろしお出版。
- 山岡政紀(2008)『発話機能論』くろしお出版。